

タブリーグ・ジャマアトとマレーシアの新型コロナウイルス感染拡大  
塩崎悠輝

2020年3月、タブリーグ・ジャマアトというムスリムの集団が大集会を開いたことで、マレーシアで新型コロナウイルス感染が一気に加速した。この集会は、2月27日から3月1日にかけて、クアラルンプールで行われ、1500人の外国人を含む16000人が参加したとされている (Reuters, 18 March, 2020)。マレーシア政府保健省によれば、5月19日の時点で、マレーシアで感染が確認されていた3347人の内、48%にあたる2375人は、この「タブリーグ・クラスター」から始まって各地に形成された複数のクラスターでの感染者であった (The Sun, 19 May, 2020)。マレーシア国内にとどまらず、外国からの参加者を通して、ブルネイ、カンボジア、インドネシア、タイ、シンガポール、フィリピン、ベトナムといった周辺諸国にも感染が広がるきっかけとなった (The New York Times, 20 March, 2020)。

タブリーグというのは、アラビア語で知らせる、伝える、といった意味で、「宣教」という意味でも使われる。ジャマアトというのもやはりアラビア語で、集合、集団といった意味である。タブリーグ・ジャマアトというのは「宣教集団」という意味のグループである。アラビア語であればジャマア・タブリーグになるが、タブリーグ・ジャマアト、という語順になっているのは、このグループがインド発祥だからであり、ウルドゥー語・ヒン

ディー語ではこの語順になる。

マレーシアでは、新型コロナウイルスの感染クラスターが、当初、タブリーグ・ジャマアト (以下、タブリーグ) によって急速に各地で形成された。なぜタブリーグが各地でクラスターを急速に形成したのか、タブリーグというグループを理解することで、その理由が説明できる。

タブリーグは、1926年にインド北部で結成された。その後もインド、パキスタン、バングラデシュなどの南アジアで最も盛んであるが、近年は東南アジアでも参加者が増えている。全世界でタブリーグに参加しているのは、4千万人前後であるといわれている。正確な人数があいまいであるのは、タブリーグが組織というよりも運動というべき形態であるためである。タブリーグには、会員登録のようなものではなく、会合や集会に様々な人々が出入りするだけである。

規模からいえば、世界最大のイスラーム運動ともいえるが、ムスリム以外にはほとんど知られていない。日本国内でも、最も活発なムスリムの運動はタブリーグで、北関東をはじめ日本各地でつくられたモスクは、タブリーグの拠点としてつくられたところが多い。ニュースなどでよく取り上げられるのは、規模が小さくても武力を使った事件を起こす集団、欧米に敵対するような主張を発信しているグループばかりである。その点、タブリー

グは、政治活動はほぼ行っておらず、そもそも政治や経済に関わる問題に関心を示さない。ムスリム社会の外にも関心がないので、欧米に言及することもない。そのため、ニュースなどでタブリーグが取り上げられることは非常に少ない。

タブリーグの活動は、毎週（毎月）開かれる地域の会合、各地への訪問、年に1度の大規模集会から成る。いずれも、ムスリム個人としてイスラームに則った生活を送ることを目的としている。会合では、互いに礼拝などの行いを正しく行えたかどうかを報告し合い、タブリーグの教本を講読する。各地への訪問というのは、毎年数か月間旅行に出て、国内や国外の諸地域のタブリーグ拠点を訪問し、地域の会合と同じことを行う。大規模集会では、全国単位、あるいは国際的な規模で集まって、やはり同じことを行う。特に、毎年バングラデシュで行われる世界大会には500万人が集まるといわれており、メッカの大巡礼よりも大規模である。このように参加者が高いに律し合うことで、イスラームに則った正しい生活を行えるようにしようという運動がタブリーグである。

マレーシアで2020年3月に行われた大規模集会は、マレーシア全国の単位で毎年恒例となっている集会である。普段は各地の会合に参加している参加者が、年に1回、1か所に集まる機会である。また、他の国の全国大会も同様であるが、講師として高名な外国人ゲストが来訪し、恒例の各地への訪問の一環として多くの外国人が参加する。参加者は、数日間共に寝泊まりして交流し、今後も互い

に律し合うことを確認して、地元に戻っていく。そしてまた地域の会合に参加する。このようにして、タブリーグの大規模集会が各地で感染クラスターを形成するきっかけになったのは、マレーシアだけではない。特にインドでは初期の感染拡大の大きなきっかけは、デリーでのタブリーグの大規模集会であったと考えられている（BBC, 2 April, 2020）。

2020年3月の大規模集会は、クアラルンプールのスリ・プタリンにあるマドラサ・ミフターフル・ウルームで開催された。この施設は、寄宿制のイスラーム学校であるが、大規模なモスクも併設している。非常に密な状態にはなるが、1万5千人が4日間共に寝泊まりして過ごすことが可能である。この施設は、マレーシアではデーオバンド派の教育を行うイスラーム学校としては最大で、1992年に設立された（久志本, 2014: 327）。

デーオバンドは、インド北部の都市名であるが、そこにあったイスラーム学校を発祥として、カリキュラムなどを共有するイスラーム学校や大学のネットワークが南アジア一帯で形成されている。アフガニスタンでは、ターリバーンの母体がデーオバンド派マドラサの連合であった。デーオバンドを中心にイスラーム学校の連合体が形成されていったのは、19世紀後半からであるが、タブリーグは、デーオバンド派の大衆部門として1926年に結成された。創立者は、当時のデーオバンド派の中心的なイスラーム学者、ムハンマド・イリヤース・アル＝カーンダフラウィーであった。また、タブリーグの会合でいつも読まれている教本は、やはりデーオバンド派

の中心的なイスラーム学者、ムハンマド・ザカリーヤ・アル＝カーンダフラウィーが、預言者ムハンマドや彼の教友の言行録、イスラーム法学の基礎、祈祷文などを大衆向けにわかりやすくまとめたものである。

タブリーグは、イスラーム学校で学ぶことができないムスリム大衆でも、イスラームに基づいて互いを律し合って生きていくための運動であるが、デーオバンド派のイスラーム学校のネットワークと不可分といえる。デーオバンド系のイスラーム学校は20世紀後半に東南アジアでも広がり、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマーなどで設立され、現在まで増え続けている。タブリーグ運動の参加者が子弟をデーオバンド式のイスラーム学校に通わせたいという需要があり、運動の拡大と共にマドラサも設立されていった(久志本, 2014: 328)。

マレーシアでは、デーオバンド派は1930年代から、当初はクランタンで、次いでトレンガヌで広がっていった。ウィリアム・ロフによる「法は何処より来たるか?—クランタンにおける1937年の犬の唾液に関する論争」という非常に興味深い論文がある。クランタンの王子と王女が、犬を飼うことの是非について喧嘩になり、様々な学派のイスラーム学者を招いて行われた論争についての考察である。この中に、当時のクランタンの元ムフティーが拠って立った学派としてデーオバンド派が登場する(Roff, 2009)。デーオバンド派はクランタンで、決して主流派ではないものの、継承されていき、デーオバンド式のマドラサも設立されていった。クランタン

出身で、インドやパキスタンに留学してデーオバンド派の学校で学んだ代表的なイスラーム学者としては、クランタン州の首席大臣を務めたニック・アブドゥル・アズィズ・ニック・マットがいる(Shiozaki, 2020: 13)。

タブリーグの運動とデーオバンド式のマドラサは、マレーシア全国に広がっていき、近年では年に1回の大規模集会には、1万人以上が参加している。移動と対面を重んじるタブリーグの活動形態が、新型コロナウイルスの感染拡大につながったといえる。新型コロナウイルスの感染拡大によって、世界各地で宗教施設が脚光を浴びることになったが、それは、初期の感染クラスターを形成する場となったためである。韓国やフランスにおけるキリスト教会、米国やイスラエルにおけるユダヤ教のシナゴグが、そのようなクラスター形成の場となり、タブリーグの集会もまた同様に問題視されることとなった。新型コロナウイルスの感染拡大が社会的に多方面で問題を引き起こしている際に、宗教が寄与するところが少なく、むしろ問題の発生源として注目を集めたことは、長期的にも大きな影響があると考えられる。

#### 【参考文献】

- 久志本裕子 (2014) 『変容するイスラームの学びの文化—マレーシア・ムスリム社会と近代学校教育』 ナカニシヤ出版
- Roff, William (2009) *Studies on Islam and Society in Southeast Asia*, NUS Press.
- Shiozaki, Yuki (2020) “The Rise of the Deobandi School and Hadith Studies in

Malaysia: Innovation of Sharia  
Interpretation through the Indian  
Connection,” *Comparative Study of  
Southeast Asian Kitabs (5) (SIAS  
Working Paper Series)*, Vol. 21. pp. 1-  
23.

2020年11月23日投稿受付

